

## 天台教学における円教

曹 良 淑  
(日 蔵)

天台教学における教学上の中心課題は、「諸法実相」の得知ということである。この実相の得知を可能にする不可欠の直接的な宗教的事項として「正修」の修習が要請される。この行の体系は、円頓止観の名で呼ばれているものである。「摩訶止観」に説示される、「正修」の行の体系の基本構造を示すと、

まずはじめに菩提を求めんとする堅固な意志（菩提心）の発起ということである。菩提を求めんとする心が確立していなければ、仏道の一步の前進も、のぞまれないから、まず菩提心の発起の重要性が力説されている。

そのあと予備的行（二十五方便）の順守、これらに導びかれた正修（正修止観）の実修の實踐的事項が総合された体系として示されているのである。即ち『摩訶止観』では、三種止観を説いて『次第禪門』『六妙法門』を円頓一実止観に融合し、進んで四諦、四弘、六即の止観を示し、四種三昧の各々に止観を説き究極の課題である「諸法実相」の究尽を推し進めてゆく時、観察の対象としての諸法を、智顛は十種に類別、整理して行の修習にはっきりとした方向を与えながら、一切行を止観の一語に統撰させているのである。

本論では、まず仏一代の教説を判じ、円融相即の教旨を示す円教の真なる意味を解明し、次には、菩提心の正しいすがたを四諦、四弘誓願、六即に即して論じ、円教の立場を示す無作の四諦を四教と三諦との立場から説明しつつ、天台教学の中心課題を知るところを目的とする。

## 一、円教の名称

化法四教の第四は円教である。『大部四教義』卷一に、「四に円教の名を釈せば、円は不偏を以て義と為す。此の教は不思議の因縁、二諦、中道の事理を具足して別ならざるを明し、ただ最上利根人を化するが故に円教と名くなり。」と定義し、円教の名義を教円、理円、智円、断円、行円、位円、因円、果円の八点を挙げて、詳細に説明している。<sup>(1)</sup> 上述の教円とは、正しく中道を説かれていること、理円とは、中道即一切法の理が偏していること、智円とは、一切種智の円融が説かれていること、断円とは、断すべき無明もなしとする理の立場として不断の断が説かれていること、行円とは、一行一切行、位円とは、初一地より諸地の功德の具足が説かれていること、因円とは、二諦を雙照して自然に仏智に流入すること、果円とは、妙覚は不思議であり、三徳の果が不縦不横であることであると述べている。<sup>(2)</sup>

『天台四教儀』<sup>(4)</sup>に見ると、円は円妙、円満、円足、円頓と名づけている。『天台四教儀集註』<sup>(5)</sup>によると、円妙は三諦円融のこと、円満は三一相即して欠減なきこと、円足は事理両重の三千が一念に具足していること、円頓とは果徳を得るとは、本具の性を全うすることであって、初発心に既に得、漸次に修得するに非ざることであると説かれている。

## 二、円教の教理（絶待妙）<sup>(6)</sup>

『法華玄義』は妙法蓮華経という経題の深意を五重玄義をもって解釈する書である。したがって中心課題は妙法に

集中しており、とくに「妙」の一字を廣範な領域にわたって詳説しているのである。智顛はこの妙について迹門十妙、本門十妙、観心十妙の三種の十妙の論述を中心としているが、智顛が主張しようとしたのは、法華経の諸法実相の理論的根拠を円融三諦における絶待妙として説明していることであると考えられる。

『法華玄義』二上に<sup>(7)</sup>

妙名不可思議、不<sub>二</sub>因<sub>二</sub>於<sub>二</sub>鹿<sub>二</sub>而名<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>妙

と述べている。即ち法華経は前三教前四時に待對するに純圓獨妙なると同時に、またこれを開會して一極に帰し、鹿の待すべきなく、一切がみな妙ならざるはないという意味である。また『法華玄義』二上に<sup>(8)</sup>

若破<sub>レ</sub>龜頭<sub>レ</sub>妙。即用<sub>二</sub>上相待妙<sub>一</sub>。若開<sub>レ</sub>龜頭<sub>レ</sub>妙即用<sub>二</sub>上絶待妙<sub>一</sub>云云。

とのべている。すなわち智顛は龜に対する妙を相待妙と呼んで、この相待妙によって法華経の経題たる妙法が、他の諸經典よりも優位にあることを示している。しかし智顛は、一方において、妙を絶待妙として考察することを要請している。絶待妙とは、単に龜と優劣を比較するような妙ではなく、龜を内に包んでこれを生かす妙のことである。そしていわゆる開會の思想が絶待妙の根拠である。したがってそういう絶待妙は、開龜頭妙ともいわれる如く、法華以外の諸経に見られる種々なる方便説法は、単に龜として捨てられるのではなく、それが絶待妙法として生かされるといふものであって、その根拠を法華経の開會の論理に見出したのであろう。

円教に於ては、煩惱もその体を究めて見れば、やはり真如中道であり、決してその体を断ずるものではない。抑菩提といひ、煩惱といふも、その用を異にするだけである。すなわち迷った心が悟るのであり、迷心を外にして別に悟心があるのでない。ただその作用が異つて来るのである。したがって煩惱と菩提の關係は氷と水のようなものであって、それが氷になっている時が煩惱で、その氷が溶けて水になる時が菩提の悟りである。

『摩訶止観』第三上には<sup>(9)</sup>

天台教学における円教

今言<sub>レ</sub>絶待止観<sub>一</sub>者、絶<sub>二</sub>横豎諸待<sub>一</sub>。絶<sub>二</sub>諸思議<sub>一</sub>。絶<sub>二</sub>諸煩惱諸業諸果<sub>一</sub>。絶<sub>二</sub>諸教観證等<sub>一</sub>。悉皆不<sub>レ</sub>生、故名<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>止。止亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。観冥<sub>二</sub>如境<sub>一</sub>、境既寂滅清淨。尚無<sub>二</sub>清淨<sub>一</sub>、何得<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>観。

止観尚無。何得<sub>レ</sub>待<sub>三</sub>不止<sub>レ</sub>説<sub>二</sub>於止<sub>レ</sub>。待<sub>二</sub>於止<sub>レ</sub>。説<sub>三</sub>不止<sub>レ</sub>。待<sub>二</sub>止<sub>レ</sub>。説<sub>三</sub>非止<sub>レ</sub>。故知止<sub>レ</sub>不止、皆不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。非<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>不止、亦不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得。待<sub>二</sub>對既絶<sub>一</sub>、即非<sub>二</sub>有<sub>レ</sub>爲<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>二</sub>四句<sub>一</sub>思<sub>レ</sub>。故非<sub>二</sub>言説道<sub>一</sub>。非<sub>二</sub>心識境<sub>一</sub>。既無<sub>二</sub>名相<sub>一</sub>。結惑不<sub>レ</sub>生、則無<sub>二</sub>生死<sub>一</sub>。則不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>破<sub>レ</sub>壞。滅<sub>二</sub>絶<sub>レ</sub>絶<sub>レ</sub>滅、故名<sub>二</sub>絶待止<sub>一</sub>。顛倒想断、故名<sub>二</sub>絶待止<sub>一</sub>。亦是絶<sub>二</sub>有<sub>レ</sub>爲<sub>一</sub>止<sub>レ</sub>。乃至絶<sub>二</sub>生死<sub>一</sub>止<sub>レ</sub>。云云、是字不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>故。故名<sub>二</sub>絶待止<sub>一</sub>。

亦名<sub>二</sub>不思議止<sub>一</sub>。亦名<sub>二</sub>無生止<sub>一</sub>。亦名<sub>二</sub>一大事止<sub>一</sub>。

故如<sub>レ</sub>此大事不<sub>レ</sub>對<sub>二</sub>小事<sub>一</sub>。譬如<sub>レ</sub>虚空、不因<sub>二</sub>小空<sub>一</sub>名<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>大也。止<sub>レ</sub>亦爾、不因<sub>二</sub>愚乱<sub>一</sub>名<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>止<sub>レ</sub>。無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>待<sub>二</sub>對<sub>一</sub>、獨<sub>二</sub>一法界<sub>一</sub>。故名<sub>二</sub>絶待止<sub>一</sub>也。

と説かれてゐる。円教の止観理念は絶待止観であつて、不止不観と止観との對待のない止観である。止観の作意のない現実生活そのままを抱括するのが絶待止観である。これは円教において現実諸法がそのまま実相であると説くことと対応するもので、円教の実相を観心に依つて現証する実践止観なのである。即ち円教では諸法即実相と説くから、諸法の現実の当相と当処が、そのまま実相の全体であり、能所、事理の對立を設けることなく、非止非観をそのまま止観とするのである。

しかしこのように煩惱即菩提、または諸法の現実が、そのまま理想の実相であると知解するのみでは、円教では何物を指して断惑といふかといふ問題になる。

それは煩惱の体を断ずることではなく、煩惱の妄用を起さざらしめるをいうのであり、これを不断の断と称して居るのである。

天台大師によれば、一色一香といへども、中道にあらざるものはない。一境をあげれば、そこには必ず円融三諦

(即空即仮即中)を具する。これが諸法実相である。したがつて諸法の実相に徹するためには、三観が一心に円融しなければならぬ。これが円教の中核の教義であるのである。

### 三、円頓止観(無作の四諦)

円頓止観を説いているのが『摩訶止観』十卷である。『摩訶止観』は、はじめ序に止観の法門は、「大師の己心中所の法門を説きたまふ」ことを示し、ついで止観法門として円頓、漸次、不定の三種止観を南岳より伝えたことを述べている。

『摩訶止観』一上に見ると、その円頓止観とは、

円頓者、初縁<sub>二</sub>実相<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>境即中無<sub>レ</sub>不<sub>二</sub>眞実<sub>一</sub>。繫<sub>二</sub>縁法界<sub>一</sub>二<sub>一</sub>念法界<sub>一</sub>。一色一香無<sub>レ</sub>非<sub>二</sub>中道<sub>一</sub>。

己界及佛界衆生界亦然。陰入皆如、無<sub>レ</sub>苦可<sub>レ</sub>捨。無<sub>レ</sub>明塵勞、即是菩提、無<sub>レ</sub>集可<sub>レ</sub>断。邊邪皆中正、無<sub>レ</sub>道可<sub>レ</sub>修。

生死即涅槃、無<sub>レ</sub>滅可<sub>レ</sub>證。無<sub>レ</sub>苦無<sub>レ</sub>集、故無<sub>二</sub>世間<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>道無<sub>レ</sub>滅、故無<sub>二</sub>出世間<sub>一</sub>。純一実相。実相外更無<sub>二</sub>別法<sub>一</sub>。

法性寂然名<sub>レ</sub>止。寂而常照名<sub>レ</sub>観。雖<sub>レ</sub>言<sub>二</sub>初後<sub>一</sub>、無<sub>レ</sub>二<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>別。是名<sub>二</sub>円頓止<sub>一</sub>。

とのべている。即ち円頓止観というのは、初心から直接、実相にかかわろうとする止観の行業のことをいうのである。観察の対境は、中道であつて、まさに眞実そのものである。心を法界に繋げ、法界と一体となるのがその際の目標である。そのことが実現され、眞理と一体になると、いかなる存在も一つとして中道でないものがない、ということが明白となる。迷界を構成する基本要素である五陰、十二入も、眞如そのものである。したがつて捨てねばならない苦もないことになる。また、心を悩ます無知や塵の如く多い労いも、それが悟りの智慧となるものであるから、断すべき煩惱というものもないことになる。ただ、あるのは実相だけである。煩惱が休んで静寂の状態にあるさまを止といひ、静寂のなかにあつてすべてをありのままに照らし出すことを観といふのである。

いいかえれば、観は発心の実現を導く法であり、止は邪僻の心の止息をかなえる法にはかならないのである。さて釈尊の最初の説法以来、全仏教で用いられる仏教の根本教説である四諦を、智顛は『摩訶止観』で菩提心を発す原因として四諦、四弘誓願、六即のそれぞれに約して論述している。その中、天台独自の立場を示した円教の無作の四諦説が注目される。

### (一) 四種の四諦

四諦とは、苦・集・滅・道の四諦をいうのであるが、智顛は、『涅槃経』、『勝鬘経』の所説を参考にして、それをさらに詳しく解し、生滅の四諦・無生滅の四諦・無量の四諦・無作の四諦として整理している。

まず四諦についていえば、煩惱が原因となって苦に満ちたこの現実の迷いの世界が生起することを教えるのが苦と集という真理であり、正しい実践が原因となって苦の滅が成就することを教えるのが、道と滅という真理なのである。

まずはじめに生滅の四諦を推究して菩提心を発する場合

『摩訶止観』一上に<sup>(11)</sup>

生滅者、苦集是世因果。道滅是出世因果。苦則三相遷移。集則四心流動。道則對治易奪。滅則滅<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>還<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>。雖<sub>二</sub>世出世<sub>一</sub>、皆是變異。故名<sub>二</sub>生滅四諦<sub>一</sub>也。

とのべている。即ち生滅の四諦の場合、苦は実際に生じてあるものであり、滅する対象である。また苦の原因である煩惱は四心即ち貪・瞋・慢・癡として現実に展開するものであり、苦の滅をもたらす実践の道は苦の対治を現実に行う道である。そして解脱の境地は現にある苦を対治して実現される境地である。このように生滅の四諦の立場は、苦もその原因もまた対治の道ともに生滅し、それから解脱も煩惱を滅して無に還る境地である。(三藏教・実有)

つぎに無生の四諦については、『摩訶止観』一上に<sup>(12)</sup>

無生者、苦無<sub>二</sub>逼迫<sub>一</sub>、一切皆空。豈有<sub>二</sub>空能遣<sub>レ</sub>空。即<sub>レ</sub>色是空。受想行識亦復如<sub>レ</sub>是。故無<sub>二</sub>逼迫相<sub>一</sub>也。集無<sub>二</sub>和合相<sub>一</sub>者、因果俱空。豈有<sub>二</sub>因空與<sub>二</sub>果空<sub>一</sub>合<sub>レ</sub>。歷<sub>二</sub>一切貪瞋癡<sub>一</sub>、亦復如<sub>レ</sub>是。道不<sub>二</sub>三相<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>能治所治<sub>一</sub>。空尚無<sub>二</sub>一<sub>一</sub>。云何有<sub>二</sub>二耶<sub>一</sub>。法本不然、今則不滅。不<sub>レ</sub>然不<sub>レ</sub>滅、故名<sub>二</sub>無生四諦<sub>一</sub>也。

という。即ち無生の四諦を推究して成立する発心について、これは空の立場の四諦の解釈である。一切法が空であった見れば、苦もなく、その原因である煩惱もなく、したがって煩惱の対治の道も必要でなく、すべてが空であることを得知すれば、おのずと悟りの境界に転入することができるのと解するのが無生の四諦である。(通教・空)

三には無量の四諦であるが、これは苦・集・道・滅の四諦のいちいちにおいて無量の相をもって立ちあらわれるそれぞれの個性的な諸側面をみてとって立言された四諦の解釈である。即ちわれわれの生きる世界は、十界にわたっており、五陰の種々の組み合わせによって、無量の様相を呈しているように、無量の世界には、種種の苦がそなわっており、また苦の原因である貪欲・瞋恚・愚癡にはじまり、身・口・意三業の煩惱も無量である。したがって煩惱の対治の道にも無量の方法があり、そして煩惱を滅却して涅槃に入るにしても種々の段階差違がある。ただし四諦の無量相を説くというのは、生滅・無生の四諦では、苦集はただ分段身の因果であり、滅道も分段身の因果の対治を意味するにすぎない。しかるに無量の四諦の苦集は、分段と変易二種の因果を包含するのであり、滅も分段・変易の因果を尽滅すること、道も分段・変易の全体の対治を意味することで、四諦の法の内容に局限がないという点から無量の四諦と名づけられたのであろう。(別教・仮)

最後の無作の四諦は、化法四教の円教の中道の立場である。即ち一切法はどのようなものも実相でないものはないと見るのが無作の四諦の基本的態度なのである。

『摩訶止観』一上に<sup>(13)</sup>

天台教学における円教

無作四諦者、皆是実相不可思議。非但第一義諦無復若干、若三悉檀及一切法、無復若干。此義可知、不復委記。

とのべている。即ち苦の原因である煩惱は、本来断じられねばならないものではなく、現実を離れて修すべき道諦も表わすべき涅槃もなしと説いて、行人に対して断・離の作為を要求せず、すべては中道であり、無作であることを説示するから不可思議なりと表現している。

『法華玄義』二下によると、

無作者、迷<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>輕故<sub>レ</sub>從<sub>レ</sub>理得<sub>レ</sub>名。以<sub>レ</sub>迷<sub>レ</sub>理故<sub>レ</sub>菩提是煩惱名<sub>三</sub>集諦<sub>一</sub>。涅槃是生死名<sub>三</sub>苦諦<sub>一</sub>。以<sub>レ</sub>能解<sub>レ</sub>故<sub>レ</sub>煩惱即菩提名<sub>三</sub>道諦<sub>一</sub>。生死即涅槃名<sub>三</sub>滅諦<sub>一</sub>。即<sub>レ</sub>事而中。無<sub>レ</sub>思無<sub>レ</sub>念無<sub>レ</sub>誰造作<sub>一</sub>故名<sub>三</sub>無作<sub>一</sub>。



(會本二下二五—三四)

という。「無作とは中に迷うこと軽きが故に理に従って名を得」というのは、純粹理法の立場に拠って書くことである。空有の二辺を隔別の原理として説かず、空に即し有に即するものと説くからである。無作の四諦の立場はあくまで圓融原理を徹底し、四諦を生死即涅槃の立場で説くのであり、二律背反する諸法の相即、開会を立場とする。(圓教・中道)

相をどのようなものとして理解するのかという実相観の内容をも表示するものとして了解されている点である。

四種の四諦を图表として整理して見ると前の通りである。

### (一) 四弘誓願

四諦の理は、人間の生存が苦であるという真理(苦諦)および苦の原因が煩惱にあるという真理(集諦)を教示する。ところでこの苦もその原因である煩惱もともに人間の六根に根ざすものである。したがって四諦に従って、発心するとすると、六根のすべてにかかわるという形をとることになる。一方四弘誓願は願いであるから意業のみに関係するという形態をとってくる。四弘誓願に導かれて成立する理想の菩提心とは、内面的にみてどのような心なのか、その菩提心の究極の形態を検討して見る。

『摩訶止観』一下に

次根塵相對、一念心起、即空即假即中者。若根若塵並是法界。並是畢竟空。並是如來藏。並是中道。云何即空。並從<sub>レ</sub>緣生。緣生即無<sub>レ</sub>主、無<sub>レ</sub>主即空。云何即假。無<sub>レ</sub>主而生即是假。云何即中。不<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>法性、並皆即中。當<sub>レ</sub>知一念即空即假即中。並畢竟空。並如來藏。並実相。非<sub>レ</sub>三而三、三而不<sub>レ</sub>三。非<sub>レ</sub>合非<sub>レ</sub>散、而合而散。非<sub>レ</sub>非合、非<sub>レ</sub>非散。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>二異<sub>レ</sub>、而一而異。譬如<sub>レ</sub>明鏡。明喻<sub>レ</sub>即空。像喻<sub>レ</sub>即假、鏡喻<sub>レ</sub>即中。不<sub>レ</sub>合不<sub>レ</sub>散、合散宛然。不<sub>レ</sub>二二三、二三無<sub>レ</sub>妨。

という。即ち四弘誓願に即して成り立つ菩提心の究極のものは、諸法のあり方を三諦にもとづいて説かれている。心すなわち一切諸法は縁起の關係の上に成り立っているものであり、決して変わることはないいわば本質のようなものをもちあわしているものではないのである。一切法のごうしたあり方を表わすのが空である。しかし「主なし」といっても、一切法は無そのものではなく、現実に形をもって存在しているから仮である。一切法はそのまま法性であ



り、実相なのである。具体的な現実の諸存在を離れて考えられるべきではない。一切法のこうした有り方を中というのである。「三にあらざるしてしかも三、三にしてしかも三にあらざる、云云」という表現は、円教の中核の教義として、即空・即仮・即中の三観が一心に円融しなければならぬ。一色一境といえども中道にあらざるものはない。一境をあげれば、そこには、必ず三諦を具する。これが三諦円融の諸法実相なのである。この円融三諦は、諸法が即空・即仮・即中であり、単有でも但空でも但中でもないことを教え、とくに諸法を離れて実相を求むべきことではないということである。円融三諦は、一境三諦とも、不次第三諦とも、不縦不横三諦とも、不思議三諦とも呼ばれるが、それが円教妙智の対境であるから、これを観する働きとしては一心三観である。

要するに四弘誓願に即して成立する菩提心の理想の形態は、無作を知る発心の内容として諸法のあり方を即空即仮即中として捉える心はあるべき菩提心の形態とし、菩提心の究極のすがたであると説かれているのである。即ち円教では、円融三諦を第一原理とし、その教相門の全面に円融思想が徹底的に展開されている。観心門は、一心三観の立場で一位即一切位を説くから、因果不二であり、三惑同体であり、煩惱即菩提であるから不断而断と示されているのである。

しかしこれは理法の立場においていい得ることで、円教が実践修行を無用なりと説くことではない。煩惱即菩提をただ知解するのみでなく、実際に証悟体現しなければ、円教の目的に到達したとはいえない。そこで断ずべき煩惱も、求むべき菩提もないが、それが実証できるまで、無作の原理に基づき、円教の実践観法が説かれている円頓止観の実修を段階的に説明しているのである。

### (三) 六即

六即説は円教の階位を教示する教えとして示されている。即ち無作の修行の位次階程を端的に表現する六即の階位

と関連づけて菩提心の問題をみてゆこうとするのである。

六即とは、理即、名字即、観行即、相似即、分證即、究竟即である。

初めの理即とは、『摩訶止観』巻一下によると、「一念の心すなわち如来蔵の理なり。如の故に即空、蔵の故に即仮、理の故に即中なり。三智一心のなかに具して、不可思議なり、云云」と説いている。「如来蔵」とは、衆生に智慧がそなわっていることを教えていることばで、衆生は真理のただなかにありながら、そのことに気づいていないあり方を表わすことである。即ち眞如が衆生にそなわっているということを衆生自身は気づいていなくとも、その衆生には菩提心を発する可能性がそなわっていることを示そうとしていることであろう。三智即ち一切智、道種智、一切種智は三諦にかかわり、三諦は捉えられる所観の境である。一方三智は境を捉える能観の法であって、理即の位というのは、未だ円教に説く真理中道の教理を聞かざる位である。

つぎに名字即とは、「いまだ三諦を聞かざるをもってまったく仏法を識らず、牛羊の眼方隅を解せざるがごとし、あるいは智識に従い、あるいは経巻に従って上に説くところの一実の菩提を聞き、名字のなかに於いて、解了して、一切の法みなこれ仏法なりと知る。これを名字即の菩提となす。」と、即ち仏法を知ることができなかったものが、善知識により、經典や論書に導かれて、一切はみな仏法であるというを、ことばの上で眞如中道の教理を聞見する位である。

次の観行即とは、「もしただ名を聞いて口に説くは、虫が木を食ってたまたま字を成すことを得れども、この虫はこれ字なるか字にあらざるかを知らざるが如し。……心観明了にして理と恵相応し、行うところは言うところのごとく、言うところは行うところのごとくすべし。(中略)「智慧がいつそう深まり、眞実がよりはっきりと捉えられるようになる段階をいう。即ち観行即とは所謂理慧相応の位であって、言教を離れても行者の観智が所観の眞如中道の理と常に相応して乗違せざる位である。菩提心を観行即と結びつけて説く狙いは、菩提を求め心がただ頭だ

けのものにとどまらず、人間の存在の全体に根差すものであることを示している。  
つぎの相似即は、観智が一段と進んで、性徳を顕わして真如中道の理を證悟する位である。相似ということは、あるべきすがたに相当程度近づいた状態を意味している。菩提心を相似即と関係づけて解する狙いは、菩提心が菩提を求め心の深化の過程を教えている。

六即の第五の分真即とは、分分に無明の煩惱を断じて、真如中道の妙理を證悟する位である。あたかも月の光が満月一歩手前の月のように円かに輝き、闇がほとんど尽きなんとするが如く、ここでは無明がかすかに残る程度で、真実がほぼ十全に捉えられる。悟りのすぐまえの段階である。この段階では、菩提を求める心がさらに一層奥の深いものであることを示しているのである。

最後の究竟即の菩提とは、「智光圓滿して復増す可からざるを菩提の果と名く、大涅槃断にして更に断すべき無きを果果と名く。等覚は通せず、唯仏のみ能く通ず。茶を過ぎて道の説くべき無し。故に究竟の菩提と名く。」<sup>(20)</sup>というように、根本無明を断じ盡して、究竟の真如中道の妙理に契合する段階である。

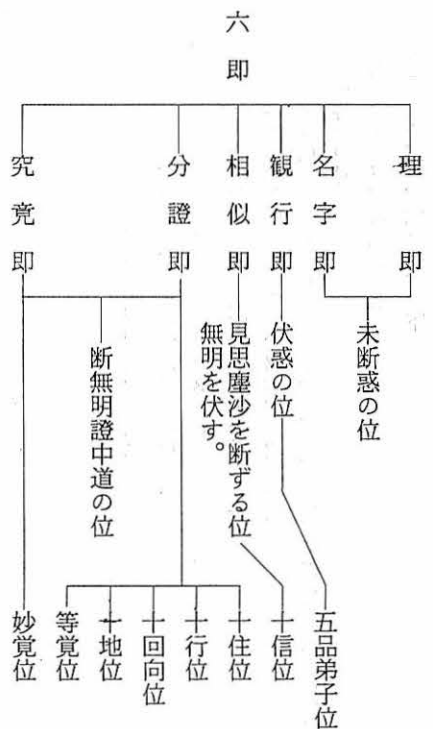
この位は、菩提を求める心が悟りにつながるものであることを示しているのである。しかし

『摩訶止観』卷一下によると、<sup>(21)</sup>

約三六即一顯是者、為三初心是、為三後心是。

答、如三論焦炷。非レ初不離レ初。非レ後不離レ後。若智信具足。聞三念即是。信故不レ謗、智故不レ懼。初後皆是。……初後俱非。為三此事故、須レ知三六即。云云

という。天台円教では、六位の不同はあるが法界の全体は唯一絶待の真如界であって、仏陀も三千実相、吾人も三千実相であり、これは同一真如であることに変わりはない。その故に六位の一々の當体即仏即ち三千実相の体を全うしている事においては齊しいのであると示しているのである。



しかして菩提心とは、仏道を一貫して支える悟りを求める心のことで、貧人にとつての宝蔵のようなものであり、はじめはほとんど意識されることではないと考えられるが、しかし菩提を求める心は、万人に具わっているものであり、その存在が悟りを求める心によって、以後次第に深められていくものである。  
六即を図示すれば上の如くである。

むすび

謂約三四弘、四諦、六即。以簡偏円発心之相。四弘是能発之誓、四諦是所依之境。六即是所歴之位。誓若無境、名為「狂願」。境不レ升レ位。凡聖不レ分。<sup>(22)</sup>

円の心を発することは、すなわち、四弘、四諦、六即を以って示されている。四弘は能発の誓、四諦は依拠する境、六即は経歴する位である。

四諦の境によって四弘の誓を発すこととは、衆生は無辺であるが誓ってすぐわんと願うことは、苦諦の境によって示していることである。菩提は無数であるが、誓って断ぜんと願うことは、集諦の境によるのである。法門は無尽であるが誓って知らんと願うことは、道諦の境によるのである。仏道は無上であるが誓って成ぜん

願うことは、滅諦の境によるのである。

このように円の心を発しても、この円の心は初心を是とするのか、後心を是とするのかそして初心と後心は同じなのか、異なるのかの問題が出て来るのである。

そこで六即が示されている。即であるから初も後もみな通低しており、六であるから初も後も濫れない。初後の理は同じであるから即、事は異なるから六であると説明している。一念は即空即仮即中であると聞いて、これを信じてるから謗らず、智があるから懼れず、初も後もみな足りるのであるが、信がないと聖境を高く推して己の智分ではないと思ひ、智がないと増上の慢心を起こして、己は仏と均しいと思ひ、初も後もともに欠けたものとなる。したがって六即は信と智を増す説なのである。

以上のように、菩提心を発こす心が六即の構造において、初心から後心へと一貫して、はたらくものとして位置づけられている点は任意すべきであらう。

## 注

- (1) 『四教義』巻第一、大正四六、七二二中
- (2) 一切智、道種智、一切種智の三智の相即一切
- (3) 一行一切行とは「大乘円因涅槃圓果。即因果而具足無缺。」大正四六、七二二中による。
- (4) 『天台四教義』、大正四六、七七八下
- (5) 『天台四教儀集注』十卷、諸宗部(縮陽十)、稻葉円成著『天台四教儀新釈』、二五七。
- (6) 宇井伯寿監修『仏教辞典』、六三一、一経の中に他の諸経を包括せしめ、而も他経を認めずして、一経の円妙なるをいう。相待妙の対。
- (7) 大正三三、六九七、上
- (8) 大正三三、六九七、中下

- (9) 大正四六、二二上
- (10) 大正四六、一下
- (11) 大正四六、五中
- (12) 同上、五中
- (13) 同上、五下
- (14) 大正三三、七〇一中
- (15) 大正四六、八下
- (16) 同上、八下、九上
- (17) 同上、一〇中
- (18) 『摩訶止観』巻第二下、大正四六、一〇中
- (19) 同上
- (20) 同上、大正四六、一〇下
- (21) 同上、一〇中
- (22) 湛然述『止観大意』、大正四六、四五九中

## 参考文献

- 一、『法華文義釈籤傍註』
- 二、『摩訶止観』
- 三、『法華文義』
- 四、福田莞顯著『天台学概論』
- 五、安藤俊雄著『天台学』
- 六、玉城康四郎著『心把握の展開』
- 七、関口真大著『天台止観の研究』
- 八、池田魯参著『摩訶止観研究序説』



- 九、稲葉円成著『天台四教義新釈』  
 十、『仏典講座』25 大蔵出版  
 十一、『仏典講座』26 大蔵出版  
 十二、『国訳一切経』経疏部一  
 十三、『国訳一切経』諸宗部三

## 華嚴観法の研究

陳 永 裕

### 論文内容の要旨

本論文「華嚴観法の研究」は華嚴教学の実践に関する教義を考察整理したものである。本論文においては、次の三点が中心的に研究された。その三点とは、

第一は、「華嚴観法」の意味について『華嚴経』の中における華嚴観法と中国の華嚴教学における華嚴観法との意味の相異について検討を行った。即ち、華嚴観法が『華嚴経』本来の意味においては、「観一切法」としての智慧観察による縁起法の体得に重点があったと考えられる。それに対して中国の華嚴教学においては、主に修行者の実践教義として華嚴観法の意味が定義されていたのではないかと見られる。というのは、多くの華嚴観法に関する文献は教義的な理論でありながらも、そのほとんどは実践に関わる内容となっているからである。

この華嚴観法に関する根本的な両面性は、『華嚴経』自体における智慧観察の意味としては、大乘經典に多く用いられている三昧(samadhi)や止観(samatha vipasyana)及び禪定(dhīra)などと内容的に深い関係を持つ教義として理解される。そして一方、中国の華嚴教学においては実践に直接関わるものとして、観行及び観門という言葉